

---

# 蝶の楽園

tismo

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蝶の楽園

### 【Nコード】

N1694Y

### 【作者名】

tismo

### 【あらすじ】

蝶の妖精であるランと異界の子である私アレク通称アル。

これは、災難の元であるスキルに振り回されながら、かわいらしいランとイチャイチャしつつ、迷宮のシビアな階層社会を生きていくフロアマイスターな私の物語である。

階層経営型手下強化系上の連中ぶっころす下剋上式ランランイチャ

イチヤ物語が、これから始まる。

## 1 プロローグ

「アルちゃん。私、就職先決まったよぉ」

蝶の妖精ランがパタパタと寄ってきて、私にそう言った。  
就職？

妖精なのに就職とはどういうことなのだろう？  
また人間に騙されてはいないか？

「ラン、就職の意味をわかってるか？」

「むー、いくら私でもわかるよー。仕事することでしょうー」

厳密には違うが、一応話を進める。

「妖精のお前が何故そんなことする必要がある。」

妖精は食べる必要も寝る必要もない。人間が行う無駄に満ちたエネルギーの循環行為を行う必要はてんでない。蝶の妖精であるランはただ蝶が世界に存在するという事実だけで生きていける。仕事をする必要はない。

「う？暇なんだもん。」

大した理由はない、か。

「なら、ランに仕事はできん。断ってこい」

「えー、なんでなんでー。私にもできるもん。バッチこいだよ。」

こいつは……。

「ラン、いつもテキトーな時間に起きてテキトーな時間に寝るではないか。妖精は縛られることを嫌う。仕事をするということは時間を縛られるということだぞ。」

「う……………」

「それに、蝶の妖精であるお前が何故就職できる？  
妖精に仕事を与える奴なんてあまりいない。  
理由は三つほどある。」

一つ目に妖精は自然現象の化身だ。長い歴史を見れば、時に人間達に信仰対象としてちやほやと扱われ、時に魔物の根源として敵対されてきた。妖精としては自らの種を滅ぼされない限り別に死にはしないし、むしろ良い遊びだと思っやつも多い。目の前のこいつなんかはそうだ。最近は魔王が勇者に殺されたおかげで怒り狂った魔物共が人間を至る所で襲っている。そのせいで妖精を崇拜する宗派は衰退し、排斥派が主流だ。

それに加えて、二つ目の理由に魔物としての蝶に殺された人間は少なくないだろうことだ。蝶の魔物は能力値としてはそんなに高くない。むしろ魔物として最弱のランクにあるゴブリンやコボルトなどの一撃をくらっただけで散るだろう。

物理的にはほとんどの蝶が紙クラスだというのに何故犠牲者が絶えないか？問題は『スキル』のやつかいさその小ささにある。

『スキル』は生物が持つ特殊効果だ。力が強くなったり、幻覚を見せたり、魔法を使ったりできるようになり、その種類は多岐に渡る。蝶族は力に頼らない多種多様なスキルを持つが故にレベルが高い冒険者が油断してやられる例もある。

その上小さく存在も微弱なので接近に気づきにくく、軽いので剣で切るにも殴るにも風圧で当たらない。その間に『スキル』の犠牲になっただ冒険者はもはや数え切れない。

故に蝶族は特に怨まれている。花がある所ならば日常生活に近い所にいるがために犠牲になった者も多いのだ。魔物でない無害な蝶が羽をむしられ炎に焼かれ大量に虐殺されることはあまり珍しいことではないのだ。だから、その妖精であるランは信仰の隆盛に関わらず、忌避され疎まれ蔑められている。嫌悪を持たない者でもそんな妖精を雇えば店の評判は下がるのでまともに雇おうなんて人間はいないだろう。

三つ目の理由として、妖精はテキトーだ。人間のように短い命でなため、あまり真面目に生きない。昔、妖精を遣い魔にしようとした男がいたらしいが、言うことを聞かず悪戯をし物を壊しどこから赤子をさらってきてきて魔物とは戦わず契約を勝手に解除し、最終的に赤字になり誘拐の罪で捕まりお縄になったらしい。……かわいそうに。ろくなことにならない。

これだけ百害あって一利もないような妖精を仕事にだなんて信じられない。

まだ勇者が人間を裏切ったと言われた方が説得力がある。

「むー。酷いよ酷いよー！アルちゃん。いつも酷いけど今日はいつも増して酷いよー！でも、そこが好き！」

顔が赤くなるのがわかる。い、いきなり何を言うのだ。こいつは。私は真面目に話をしているのだ。せつかく心配してやっているというに。まったく、これだから妖精は。

………で、でも。ここまで素直に言葉をぶつけられて、まあ、答ええないのも可哀相だ。こんなにかわいらしい笑顔が曇ってしまうことを想像したら、ああ、何と言う悲劇なのだろう。カタストロフィだ。まったく仕方ない。世話のかかるやつだ。

「……………そうか。私もだ。」「えへへー」

くっ。この天使の笑みだけで私は今日も生きられる。

「そ、それはともかく、何より騙されているかもしれない」

「大丈夫だよー！アルちゃんにもやってもらおうから！」

「……………は？」

何だと？

「私だけだったらやるわけじゃない！アルちゃんが一緒だったら騙されてても助けてくれるでしょ？」

「いや、待て！私は聞いてない！」

「私も今日初めて話を聞いたからね！それとも助ける自信がないの？」

私にはとある『スキル』がある。

「そんな問題ではない！無理だ！いくらランの頼みでも私が外に出ることは出来ん！」

「私は出てほしいもん！」

それは私がこの世に生まれ落ちた時に手に入れた私だけの『オンリースキル』と呼ばれるものだ。

「私はお前を傷つけたくはない。この樂園だからこそ、今までお前を傷つけずに済んだのだ。それを今になって、何故？」

「今までの平穩を壊してでも！私は、あなたに前に進んでほしいの

！この樂園じゃ、あなたは幸せになれないわ！」

この『スキル』で家族を皆殺しにした。

この『スキル』は一人の人間にはつらすぎる。

「私では無理だ！全てを壊してしまう」

「できるよ！私はあなたに会えたことを不運だとは思っていないの！」

ああ、この日は『大災害』なのだろうか。

それとも『神の愛娘』なのだろうか。

「ここから出して、私に何をさせるつもりなのだ！ラン！」

「……………私に話を持ち掛けたのは『魔神うる』と呼ばれる指輪の魔神なの。」「

私の持つ私だけのスキル

「魔神……………だと？」

「ええ……………封印から解放されて主人の願いを叶えている最中らしいの。そして、私達の仕事は……………」

その『スキル』の名は……………

「迷宮経営よ」

『奇運』

『奇運』（オンリースキル・パッシブ）



- ・ L A C 値を 1 (大災害) か 9 9 9 9 (神の愛娘) で変動させる。  
変動時刻は太陽か月が最も高く空へと昇る時刻。
- ・ レベルアップによって取得する『レベルアップ・スキル』を規定のものから完全にランダムにする。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1694y/>

---

蝶の楽園

2011年11月3日02時20分発行